

あとがき

月村 辰雄

2006年3月に定年退職された田村毅先生の記念号の刊行がこれほど遅れたのは、ひとえに後書きを担当する私の筆が滞ってはかばかしく進まなかった、という理由による。田村先生にも、また、寄稿者の方々にも、初めにまずお詫び申しておかねばならない。

ここに集まったすぐれた論文の数々は、かならずや先生の懐かしい思い出を胸に秘めて綴られたのであろうし、記念号という場にふさわしい取って置きの考察が盛り込まれていることでもあろう。私は、寄稿者の方々から、人生の一仕事を終えられた田村先生に感謝の気持ちを表す機会を、長いあいだにわたって妨げていたわけであるし、さらにはまた論文にも旬というものがあるのだから、いくつかの論文は発表時機を逸することになって、本来それが持っていた価値のなかがしさを減じることになったのではないかと、今、ひたすらそのことを恐れている。

それなのにどうして筆が進まなかったのかといえば、退職記念号の後書きという文章にいやおうなく課されるどころの、とんでもない重みをもった責任の圧力に、私が押しひしげられてしまったからに他ならない。田村先生は1974年にフランス文学研究室の助手に任じられ、3年後には立教大学に移られ、その2年後の1979年に東京大学教養学部に移られた後、1984年に今度は助教授としてフランス文学研究室に戻られた。それ以来22年間、東京大学文学部フランス文学研究室を支えてこられたのであったが、私自身が、田村先生が抱いておられるに違いない感慨をいくぶんかでも窺い知る年齢になってみると、そのお気持ちによく拮抗するだけの文章を綴ることができるのかどうか、一挙に気持ちが萎えてしまう。もちろん私は中世文学研究の徒であって、先生のネルヴァル研究をはたしてどこまで理解することができるのか、という惧れの気持ちがある。また、後で触れることになるが、学内行政でも責任ある職務の数々をこなされてきた先生のご苦勞を、いったいどこまで正しく伝えることができるのか、はなはだ心もとない思いに駆られてしまう。さらにはまた、こうした記念号の後書きというものは、こう言っては語弊があるが、いくぶんか過去を愛惜するという意味合いがあり、しかしなが

ら田村先生は、現在、ある意味では東大在任中よりもいっそう意気軒昂としていらっしゃり、私が繰り出そうとする回想の文章をお喜びにならないのではないかと、心配にもなってしまう。

しかし、考えてみると、私はずいぶん田村先生とご縁が深いのである。田村先生の助手時代、私は修士課程の学生であった。田村先生が助教授として文学部に着任された時、私は助手を務めていた。田村先生が主任教授の頃、おそらく私は足手まといにしかならなかったが、それでも少しは助教授としてお手伝いできたのではないかと考えている。

田村先生が留学中のパリから、助手職に就くべく日本に呼び戻されたのは、1974年の1月であったか、2月であったか。ちょうど私は卒業論文を提出して大学院の入試を受けたばかりの頃で、合格したのをさいわい、しばらく大学から遠ざかって羽を伸ばした。それが、4月に修士課程の1年生として久しぶりに研究室に顔を出したその日、それまで聞いたこともなかった元気のよい先生の声が、部屋の外まで響いてきたのをいまだにはっきりと思い出すことができる。助手が研究室運営の要であることは言を俟たない。私は、いくぶんか陰鬱の気味合いの漂っていた研究室に——といっても、あくまで印象で、研究室などというものは学部の学生にとって敷居の高いものに違いない——新しい風が吹き抜けるような思いがしたものだが、実際、田村先生は、その2ヶ月ほど前の帰国早々、その年の修士論文の公開審査の場で旋風を巻き起こしていたのであった。

今は昔の話になってしまうが、フランス文学研究室が論文審査を公開としたのは、68、69年の全共闘運動の後のことである。私はそのあたりの詳しい経緯を聞いていないが、この頃の修士論文は今とは比べものにならぬ重みをもっていた。修士課程の定員は毎年10名。それが、博士課程では5人に絞られた。競争は過酷で、論文の作成に万全を期して4年ないし5年をかける学生も稀ではなかった。学生は教官の居並ぶ密室の中に一人ずつ呼ばれ、そこで試問を受け、その後その密室の中の審議によって教官が合否を決める。その仕組みがはなはだ民主的ではない、というのがフランス文学研究室の大学院生たちの主張であった。博士課程に進むにせよ、大学を離れるにせよ、少なくとも試問の部分は公開として、それぞれ互いの論文の出来不出来を納得した上のことでなければならない。——もつともな話であるけれども、学生

がこのような要求を突きつけた研究室が他にあったのかどうか。また、それを教官が受け入れる雅量を有した研究室が他にあったのかどうか。

当時のフランス文学研究室は法文1号館の3階。現在では教室に姿を変えているが、銀杏並木に面して並ぶ三つの部屋が宛てられていた。一番奥の部屋は細長く、両側の壁面を辞書類が占め、その中央には、いつの時代にか、きつと詠えて作られたに違いない大きな机が二つ並んでいた。修士論文審査の日には、その片側に学生が並んで座り、それと対面して、その頃は大学院に教養学部から数名のフランス語部会の教官が出講していたので、それとほぼ同数の教官が座ることになった。ギャラリーは、といっても、大部分は翌年以降に審査を控えた修士課程の学生たちであるが、入り口近くのスペースにそれぞれ椅子を持ち込んで、いくぶん緊張気味に傍聴したものであった。

公開の審査を受け持った者なら誰でも痛感することになるだろうが、これはある意味で教官が審査される場でもあった。その年の審査では、公開となつてまだ何年もたつておらず、おそらく教官の側としてもどのように審査を進めたらよいか、戸惑うところが大きかったのだらうと思われるが、先生方のお一人が、なにか適切を欠くと思われる質問を課したことがあったようである。それに対して留学から帰つたばかりの田村先生がギャラリー席から敢然と立ち上がり、そのような質問にどれほどの意味があるのかという、抗議の発言をなさつたのだという。

私の関知する限り、その後、ギャラリー席から発言があつたという例を思い出せない。先生方のあいだには、その時ひそかに「彼を助手にして大丈夫だろうか？」という走り書きのメモが回つたそうであるが、しかし公開審査という理想を掲げる以上は、ギャラリーからの発言もまた許容するというのが筋というものであろう。—— 公開審査が恒例となつて40年後の研究室主任として、私はそのようにかんたんに言つてのけることができるけれども、ギャラリーの学生にとっては教官側の審査に対して異を唱えるのであるから、よほど自分の知識に自信を持っていなければならない。さらにまた、もちろん、たいへんに勇気のいることである。

いったいに田村先生は目下の人間からの批判にはことのほか謙虚で、相手が物怖じせずと言いたいことが言えるよう、こまやかな配慮を示されるのが常であつたが、目上の人間に対してはこれがにわかに反転し、年齢の上下にも職務の軽重にも物怖じするということを知らず、必要な場合にはきわめて合理的に相手の非を鳴らされたものであつた。これははるか後年になつて、1991年に菅野昭正先生が退官なさつた後、田村先生が助教授ながら主任業務

を引き継がれた当座は、フランス文学研究室は、まさに先生のこの勇気によって事なきを得たのである。

文学部には戦前からの講座制の堅苦しい雰囲気の色濃く残っていた時代だということを、少しでも考えていただきたい。また、当時、駒場の教養学部には先輩筋に当たる先生方が元気よくひしめいていらしたことも、思い出していただきたい。数年のあいだ、このような後書きという場所では口を憚らざるを得ない出来事が相次いだわけであったが、田村先生はフランス文学研究室の伝統と利益を守るため、僚友の塩川徹也先生と手を携えて、文字通り体を張っていらした。その責任の重さに、おそらくは目もくらむような思いをされたこともあったに違いない。あの田村先生がめったに笑顔を見せず、触れたら手が切れて鮮血がほとぼしるような、そんなびりびりした気分を漂わせていた日々があったのである。私は何度か張り詰めた交渉の場に陪席したことがあったけれども、それはいくぶんか、子供の時分にガキ大将の後にくっついて隣の町内に喧嘩に出かけるのに似ていた。私は、強力なリーダーに率いられた心地よい悲壮感の高ぶり、というものをずいぶんと味合わせさせていただいた。

自分の周りを見渡してみても、田村先生ほど数多くの分野でリーダーシップを——それも既存のしきたりにとらわれぬ、進取の気性に富んだリーダーシップを発揮なさった方を私は知らない。

70年代の後半から80年代にかけては、時ならぬ仏和辞典編纂ブームに沸いた時代であった。ちょうど大修館の新スタンダード仏和辞典を飛び出された福井芳男先生が、旺文社に拠って新しい仏和辞典の編纂を企てられた頃であった。田村先生はその福井先生に見込まれ、編集主幹格として旺文社のロワイヤル仏和辞典に招かれた。私は留学から帰って新スタンダード仏和辞典の末席に加わっており、編集会議の日取りが重なった日の夕方など、何度か神保町の居酒屋で田村先生と顔を合わせたことがあったが、いってみるならば後発のロワイヤル仏和辞典の進捗は早く、何年もしないうちに分厚い大型の辞典が先に刊行の運びとなった。

スピードの秘密は、どの仏々辞典に準拠するかという点に依ったのではないかと思われる。まだデジタルのデータベースを利用するなど思いもよらぬ話であった。また、フランス語学界には、用例を克明にカードに取って自前

のデータによって辞典を執筆している方など、朝倉季雄先生のほかにいらしたのだろうか。仏和辞典には、引き写すのではけっしてないにせよ、それぞれ基本的に準拠する仏々辞典があつて当然の時代であつた。初代のスタンダード仏和辞典の執筆の頃はフランスに適当な仏々辞典が存在しない端境期で、ハラップスの辞典がずいぶん活用されたものだと伺っているが、私などのちよつと下の世代までは皆がこのスタンダード仏和辞典で学んだものであつた。——私は迂闊なことにフランスに留学してはじめて「コムサ」という表現を耳にし、あわててこの辞典を引いても出ていなかったことが思い出される。念押し「シルヴプレ」も見当たらなかつた。そういう時代であつた。

その後フランスでは、歴史主義に則つた、一見厳密この上ないように見えるロベール系の大小の辞典が刊行され、また、それに対抗するかのよう、口語表現を重視した斬新なディクショネール・デュ・フランセ・コンタンポランも刊行された。後者をおおいに参考にしたと思われる三省堂のクラウン仏和辞典が現われて、フランス語学界を驚かせたのが70年代の末であるが、驚かせたというのは、それまで各社の仏和辞典を執筆する先生方は、おそらくロベールの歴史主義をいかに学習用の辞典と調和させるかに腐心され、そのために筆も滞りがちであつたからである。

そのような中で田村先生のロワイヤル仏和辞典が一步先んじて完成したのは、引きやすさという便宜を重視したからではないかと思われる。田村先生の面目が躍如とする合理的な割り切り方だが、先生は7巻本のグラン・ラルース・ド・ラ・ラング・フランセーズを高く評価なさっていた。ロベール系の辞典の語釈は、まず意味の外延を述べ、ついで内包を加えるといった典型的な定義の方式を取っているのだが、それはすべての語釈においてかならずしも有効とはいえず、時にもってまわつたもどかしさを生じる場合がある。先生はまずこの事大主義を嫌われたのであろう。また、ラルースの大辞典のほうはそれぞれの項目の後半において歴史的な語義分類から離れ、特殊な比喩義や技術用語などを一括して列挙するにとどめている。田村先生が研究の対象とされたネルヴァルにしても、ユゴーにしても、また16世紀のデュ・バルタスにしても、いずれも彩り豊かな語彙を用いる作家たちであるから、先生はずいぶんとこの大辞典をお引きになり、ふつうの意味ではないと見当をつけると、すぐに探索の目は項目の後半に移つて、そこからの確な意味をすばやく見つけ出されたことがおありになつたのであろう。おそらく先生は、辞典にとってある意味でもっとも大切なこの参照性を重んじられ、その列挙の方式をロワイヤルの辞典に採用なさつたのだと思われる。

ロワイヤル仏和辞典が刊行されたのは、田村先生がすでにフランス文学研究室に助教授として着任された後の1984年のことである。私はどうの立った助手として、先生が研究室に新鮮な空気をもたらすのを傍らから拝見していた。多少の語弊があるが、それはフランス文学研究の組織化、といつてよいかもしれない。たとえばネルヴァル研究会である。

私の手許には1992年になって刊行され始めた『ネルヴァル手帖』の第1号があり、後書きには井村實名子先生が回顧的な文章を載せていらっしゃる。それによると、留学からお帰りになった後、田村先生とネルヴァル研究の先輩の入澤康夫先生のあいだに研究上の交流が生まれ、参考文献の調査や、ネルヴァルの作品の載る19世紀半ばの雑誌・新聞のマイクロフィルム の蒐集に関して、お二人は緊密に協力しあっていたのだという。そこにネルヴァル研究者である井村、丸山、小西の諸先生が加わり、第1回の会合が持たれたのが1980年の5月。

田村先生は、人一倍、後進を育てるといってお気持ちの強い方でいらしたから、そこには大学院生たちが自由に出入りできたらしい。私が学生の頃に読んだ文学史の参考書では、ネルヴァルはまだノディエと並んで、最近注目を集めるロマン派の群小作家、という扱いであった。それが日本でみるみるうちにメジャーな研究対象として注目されるようになっていったのは、もちろんその作品の魅力もさることながら、このネルヴァル研究会の存在を抜きにしては説明できないであろう。

田村先生はこの会で、なによりも参考文献・資料の共有化ということを推し進められたのではないかと思われる。特にネルヴァルのように、ある新聞に連載した文章に手を入れ、それをまた別の雑誌に掲載する。何度もそんなことを繰り返すうちに、いくつかを集めて一冊の作品集にする。さらに、そのうちのいくつかはオブセッションのように脳裏から去らないので、再び発想の手がかりとして別の新たな作品に成長させる、という厄介な作家を相手にする場合には、なによりも作品の生成と発展の経路を正確に跡付けることが大事であって、その作業を抜きにしてある作品の最終到達点ばかりを論じていても、着実な研究としては実を結ばない。

先生が駒場の教養学部助教授時代に、ネルヴァル作品の初出誌を網羅的に、それも見落としがあつてはならないから創刊号から最終号までをマイクロフィルムで蒐集なさったのは、このような理由によることである。しかも本郷

に着任後は、研究室にアメリカ製のマイクロフィルム・リーダーをお買い求めになり、そのフィルムを次から次へご覧になっていたのを私は覚えているが、マイクロフィルムで資料を求めて利用するといっても、まだまだ一冊の稀観本のフィルムを取り寄せ、町の専門写真店で現像させて、後生大事に参照するという時代であったことを思い出していただきたい。そうした資料を大学院生たちの研究にも自由に提供するのであるから、後進が育たないはずはないであろう。

さらに先生の面目が躍如とするのは、そうした一次資料を駆使して、これほど克明で精確なものはフランスにも存在しないところの、ネルヴァルの作品の年表式の総目録をお作りになってしまったことである。1992年から翌年にかけて先生は大型の科学研究費をお取りになり、若手の研究者および大学院生たちとの共同作業によって『年譜、ジェラルド・ド・ネルヴァル、作品・記事・書簡総目録（フランス語文）』を刊行された。これは、上に述べた迷路のように錯綜するネルヴァルの作品生成の経路を辿るための綿密な基礎資料であって、以後のネルヴァル研究には不可欠の基本参考書であるが、それ以上に、若い方々には一次資料を取り扱う恰好の訓練の場となったことであろう。私には、それが田村先生の真の目的であったのだ、とも思われる。

また、さらに、こうした共同研究で育った後進の方々に活躍の場を与えるために、新しい『ネルヴァル全集』の刊行も企画され、これは1997年から6巻本の形で刊行されることになった。私は、後進の方々に活躍の場を与えるために、と言ったけれども、それはネルヴァルの有力な作品が誰によって翻訳され、一方、田村先生がどの作品の翻訳で我慢されているかを見れば一目瞭然であろう。—— もっとも、それによって、先生がネルヴァルのなにをもっとも愛されたかが理解されるのだが、そのことについては後で触れる。

この文章の初めのほうで、私は、田村先生が進取の気性に富んだ、という意味のことを書いた。それは、80年代の初め、パンチカードにデータを入力して、それを大型機器で処理するというコンピューター利用の創生期の頃から、先生がいかにかこれを研究の中で活用するか、つねに工夫を怠りなかつたその先進的な企ての数々に見て取ることができる。

今の若い人たちは扱ったことがあるのかどうか、容量がせいぜい1メガのフロッピー・ディスクというものが現われたばかりであって、その数十枚に

たとえばバルザックの作品のかなりの部分を打ち込んだというデータベースを手に入れられた先生が、その活用方法をあれこれ楽しげに語られておられたのが、たしか 80 年代の半ばの頃であったと思う。日本における IBM 系の入力手段ではまだアクセント文字を記録することができず、é を e1、è を e2 と入力して、出力の段階でこれを一括して変換し、外字を用いてプリントアウトするという仕組みのデータであった。

時代が急激に動きつつあった。まず、ある作家、ある作品のコンコードダンスの作成という地味ながら不可欠であった仕事が、データベースの全文検索の前に意味を失ってしまった。さらにそのデータベースできえ、インターネットの普及にともなって自前で作成、ないし所有するものではなくなり、フランテキストなどにアクセスすれば自由に使いこなすことができるものとなった。これが、わずか十年のあいだに生じた出来事である。私などは玩物喪志の口で、人に遅れてパソコンを購うと、ワープロに打った原稿をいかに美しく印刷するかにばかり腐心し、あれやこれや、フォントの種類を試すことに時間を費やしたものであったが、—— 田村先生はこの間、新しい技術の効力とその技術が向かう先とを見定め、全国のどのフランス文学の研究室にも先んじて必要な機器を導入された。もちろん、半ばは学生のことを慮られたのであって、新しい時代の研究手段といったものになるべく早い時期から親しませてやろうという親心であった。

田村先生ご自身がいかにこれを使いこなされたかについては、「幻想詩集とその他の幻想 —— ネルヴァルの詩想とその反響（フランス語文）」と題された論文がよく物語っている。これは 2002 年であったか、2003 年であったか本郷キャンパスで催された、パリ第 8 大学、ジュネーヴ大学、東京大学による「三大学コロック」という、かなり大掛かりな国際シンポジウムでの発表がもとになっている論文であるが、先生は、従来の文学研究におけるスルス研究および受容研究が、データベースの利用によってどのように変容を遂げるべきであるか、先駆者としてお示しになったのだと思う。

それまでデータベースは、当然のことながらスルス研究にとって有効であると考えられていた。先生は『幻想詩集』の有名な「黒い太陽」の例を取り上げ、これをフランテキストで全文検索されるうちに、ネルヴァルを遡る例ではなく、むしろ発想を逆転させてネルヴァル以降のボードレール、ユゴー、ブルースト等に使用例が豊富にあることを見つけ出される。さらに、そのひとつひとつを検討して、ネルヴァルからの引用であることを断定されると同時に、それぞれの作家ごとに「黒い太陽」がどのように変容してゆくのかを

説明され、きわめて興味深い文学史的考察へと発展させている。一方、論文の後半では、今度は「オルフェウスの豎琴」という表現の検索の例を挙げられて、ネルヴァルと高踏派のテオドール・ド・バンヴィルに類似する文を発見される。しかし、それをもってただちにバンヴィルの模倣とは言えないのであって、実証的な知識を駆使したネルヴァルの交友関係の検討から、むしろネルヴァルのほうがバンヴィルの若書きを利用したのであったという、これもまた一種の逆転を含む考証が始まる。——つまり、データベースの利用によって壮大な受容研究の道が開かれるということと、これをスルス研究として用いるのであっても実証的な伝記研究の裏打ちが必要であるということとを、両方ともにお示しになっているのである。

田村先生はたしかにデジタル・データの活用について、当初から大きな興味を示された。しかし、研究のコーパスが広がるということをお喜びになってばかりもいらっしやらなかった。デジタル・データといっても、従来からの伝記研究、文献学的調査の積み重ねがなければ、これを十全には使いこなすことはできないという批判的なお考えからも明らかのように、ご自分の研究を越えた広い視野から、データのデジタル化ということの持っている社会的な意味、あるいはそこに含まれる危険までお考えになっていらした。それがもっともよく明らかとなるのは、1995年から先生を代表者として進められた日本学術振興会の「マルチメディア通信システムにおける多国語処理研究プロジェクト」という、たいへんに大掛かりなプロジェクトであろう。これについては、フランス文学関係者のあいだでよく知られているとは限らないので、私が書いておく必要があるだろう。

その経緯は次の通りである。田村先生は主任助教授として苦勞なされた後、1991年12月に教授昇進。その後、ほど経ずして総長補佐の職に就かれた。法人化以降の国立大学に副学長や理事が簇生してあらずもがなの仕事を作り出す以前、総長直属で大学全体の運営に携わる教官スタッフという、各学部から派遣されるこの総長補佐ばかりであって、それだけに広い視野と実行力をもった選り抜きの教官が選ばれたものであった。先生はその後、1996、97年に文学部評議員をお勤めになり、さらに1999、2000年には文学部長の重責を担われることになる。

ところで総長補佐の同僚として、田村先生は理学部の坂村健氏と出会う。

いうまでもなく、斬新なコンピューター・システム、トロン の考案者である。ともに、IBM とマイクロソフトが席卷するコンピューター・システム、とりわけ、その非アルファベット言語の処理方法に危惧の念を抱かされていたからだろう、お二人は意気投合なさり、そこに漢字学の山口明徳氏、西洋古典学の片山英男氏が加わって、このプロジェクトが立ち上げられたのである。

田村先生が危惧されたのは、とりわけ漢字の問題である。2 バイトで規定される漢字コードでは、コンピューター上で最大でも 1 万数千の漢字しか電子文字として扱うことができない。そのため、漢字を用いるデータベースでは—— ということは、日本の文字データのすべてということだが、そのコード表に載らない漢字は、同義の異字体の漢字によって置き換えられるか、あるいはそこだけ別種の記号を置いて、注釈の形でその漢字の偏、旁、および構成要素を欄外に説明するという表記法に頼らざるを得ない。後者はきわめて厄介であるし、そもそも全文検索の対象からはずされてしまう。したがって大勢の趣くところは前者の処理であるが、その結果、漢字の数は 1 万数千に限定されてしまう。長い歴史を経て、それぞれ必然的な理由から新しい漢字を作り、あるいは異字体を発展させてきた一国の文字文化が、ある時代の技術のレベル、それも、いってみるなら私企業の恣意的なシステムによって、その伝統のかなりの部分を痩せ細らせることになってよいのか、という問題である。

田村先生は、学内行政で重責を担っていらしたそのかたわら、このプロジェクトを進められた。山口教授の協力のもとに、過去の日本で用いられていたあらゆる漢字の蒐集を始められ、10 万に迫る数の漢字をリストアップなさると、坂村教授の協力のもと、それにコードを割り当て、—— 私は遺憾ながら技術的な問題をよく理解できなかったが、そのすべてをトロン・システムのコンピューター上で電子文字として使用できる環境を整えることに成功した。いささか大げさな言い方になるが、コンピューターの出現以降、いわば科学技術によって振り回され続けた人文学が、はじめてその要請によって科学技術にシステムへの内省を迫り、新しい工夫を強いた瞬間といっても過言ではないであろう。

学部長時代の田村先生にとりわけ顕著に窺えた姿勢が、この、過去の遺産の継承ということであったように思われる。ちょうど国立大学自体が法人化に向けて大きくカーブを切り、効率を重視しているように見える社会の圧力に屈して、古くからのシステムや制度をいじり始めた時代—— それも、時としてはそれが 50 年も 100 年も以前からの伝統なのだということさえ知らず

に、1、2回の審議のもとに葬り去ってしまう時代であった。変えることはか
んたんだ。しかし、元に戻すことはむずかしいという、田村先生の口癖の一
つが思い出される。それが50年も100年も続いたということには、鬱蒼とし
た過去の経緯の奥に、たかだか10年、20年しか在職しない大学教員がよく
窺うことのできない理由が隠されているのであって、それを古くなったので
畳替えでもするように気軽に変えてしまうというのは、犯罪ではないにして
も、粗忽の責めを負うべきであろう。

それにつけても、田村先生の口から、何度も山田喬先生のあるお言葉が繰
り返されたことが思い出される。先生が助手の頃であったが、研究室にずい
ぶん古びたカップ・ボードが置かれていたことなら私も覚えている。昔、
渡辺一夫先生のお宅にあったものが、物のなかった時代に研究室に贈られて、
以後重宝されていたらしい。それが壊れてしまったので、立派なものである
から修繕してまた使いましょうという先生に対して、その頃最長老でいらし
た山田先生が「古いものはよいに決まっている。だから、棄てろ」とおっし
ゃったというのである。

このお言葉を口にするとき、これ以上、田村先生が注釈めいた語を付け加
えることはない。いつでもこの話は山田先生のお言葉で終わった。いったい
田村先生はなにを伝えたかったのであろうか。お気持ちをあえて付度するに、
山田先生は明治の名家の裔である。戦災で失ったにせよ、由緒ある名品の中
で暮らされ、その過去の重みのなんたるかを知りつくした人にして、はじめ
て「棄てろ」という、一見したところ気風のよい言葉を口にする資格がある
のだ、ということだろうか。

2006年1月、田村先生は研究生活にひと区切りをつけるべく、ご著書『ジ
ェラル・ド・ネルヴァル、幻想から神話へ』を刊行され、これを博士論文
として提出。教え子の皆さんがつめかける中で颯爽と公開の審査をお受けに
なり、そして定年で東大をお去りになった。

先生が助教授として着任のころ、私は「ネルヴァルの詩学」と題された一
連の紀要論文をいただいたことを思い出す。それは、おそらく、助手となる
べく急遽呼び戻されたためにフランスに提出する博士論文という形を取らな
かったご研究を、勤務先の立教大学、東京大学教養学部の紀要に少しずつお
出しになったものであり、発表のたびに姿を変えるネルヴァルの詩篇を当時

の新聞や雑誌に博搜され、一つ一つの詩篇の異同を文献学的な立場から丹念に跡付け、その変容の意味を作品論的に考察された論考であった。ただ、すでに述べたように、この研究の文献学的な部分はその後、多くの方々との共同作業によって『年譜、ジュエール・ド・ネルヴァル、作品・記事・書簡総目録』の中で精緻に跡付けられている。それから10年、ご多忙の校務の合間を縫って先生は研究を進められ、ネルヴァルの作品創造の秘密に照準を定めた考察をこのご著書の中で展開されたのだ。

その中心はいうまでもなく後半の第3部「幻想と神話」、第4部「自己探求の道程」にある。先生は『幻想詩篇』中の「エル・デスディチャド」「デルフィカ」「アルテミス」等の詩篇にあらわれる神話的女性像の生成を初出時から時系列に従ってたどり、そこにネルヴァルの創作上の動機というか、通奏低音のように響き続けるある原理を見出される。その原理こそが、文字通り、初出論文の題名である「ネルヴァルの詩学」にあたるものであろう。第3部の結論になると思われる一節は名文であるので、ご著書からそのまま引用しておこう。

詩句のすべての語が幾重にも重ねられた語義をはらんで揺れ動き、「愛」を意味する同義語が反復使用され、そして最後の詩句が再び最初の詩句へと送り返され、無限循環の意味を生成する詩法は、愛する人たちの正体をつかみえぬまま迷宮をさまよう詩人が、自己を表現するために見いだした最高の詩的表現であった。ネルヴァルの詩の難解さとは、この迷宮を迷宮さながらに表現しようとした詩法にあり、表現の捉え難さは詩人自身が自己の正体を追い求めつづけているからに他ならない。(同書249ページ)

ネルヴァルの詩学をこのように見出された先生は、第4部において、それまで見過ごされていた『火の娘たち』の序文の再評価へと導かれる。先生はネルヴァルの伝記的事実、さらにいくつかの生成段階にわたる序文の原稿の異同を綿密に検討された末に、「自己の正体を追い求め」とはどのようなことなのか、次のように結論付けられる。

詩人が下りてゆく地獄とは、失われた愛する女の変貌につれて幾重にも際限なく分裂・増殖を重ねかねない自己同一性の迷宮であり、オルフェウスの運命の自覚がこの迷宮からの脱出のアリアドネの糸となり、詩人を地獄下りの詩と物語の創作へと導く。

このように神話的存在に自己を仮託した自己同一性探求のシナリオが、詩人ネルヴァル最晩年の作品群、とりわけ『幻想詩篇』と「オーレリア」の骨格をなす……(同書、421ページ)

ネルヴァル研究の門外漢である私がどこまで先生の真意を把握しているのか、はなはだ心もとない次第であるが、その代わり、第1部「伝記と虚構」の、熱に浮かされたような不眠の彷徨と、ブランシュ病院への入退院の繰り返しと、そしてそのわずかな合間をかいくぐって書き続けられた原稿の考証とからなる最後の数節の迫力が、まさに「地獄下り」を思わせることならよく理解できる。私は、ご在職の最後の数年に、先生がしばしば遺作『散策と回想』の魅力をお聞きしている。また、この作品の文体それ自体が散策の運動を模していると論じた、ある学部学生の卒業論文を激賞させるのを耳にもしている。先生は、なにかご自分の性向と似通うものを、ネルヴァル晩年の作品に認めていらっしゃるのではないか。かつて仏和辞典をご執筆のころ、先生は、忙しい時間の合間に半時間の暇を見つけて数項目の原稿を仕上げるのが自分には苦ではない、とおっしゃったことがあったが、まさに先生こそは、人に倍する激務の合間にネルヴァル研究を突き詰められたのである。

さて、最後に、田村先生がご退職になった後の私の心細さについて触れておこう。

2004年の国立大学の法人化以降、東京大学も大きく変質した。文学部も世知辛くなった。フランス文学研究室の属する言語文化学科への進学者数がずいぶん減少したのは、社会全体の変化を反映したもので、大学としてはいかんともしがたい問題であるにもかかわらず、そして、そのような時勢であるからなおさらのこと、国立大学の中に正統的な外国文学研究の場を保持すべきだと思われるにもかかわらず、ほかでもない、当の文学部の内部からこれを改革すべきだとする声が上がっている。

たとえば、一国文学の枠内にコーパスを限定するのがよくないと主張して、言語文化学科の中に広く世界文学を学ぶという新しい研究室を作ろうとしたり、また、学部の段階でやはり一国文学に限定するから若い学生が進学を嫌うのだと唱えて、学科という大枠に進学させて、英文学でも日本文学でも、あとの履修は学生の自由に任せようとしたり——耳障りのよい言葉を連ねた改革案ではあるけれども、要は、外国語といえば英語のみに、それもコミュニケーションの道具としての英語のみに限ろうとする世相への迎合ではないのか。

この何年間か、私はフランス文学研究室の心もとない主任として、こうした案件の応接に神経をすり減らした。はなはだ大仰な言い方となるので恐縮しなければならないが、事は、フランス文学研究の日本における本拠の一つの存続にもかかわる。時に孤軍奮闘、私は、田村先生のような影響力も確固たる意思の力も持たぬ身の上であることを思い知らされたが、それでも私は、先生であったらたしてどのようになさるだろうかと自ら問うて、自分を鼓舞していることを述べておかねばならない。

とはいえ、こうした繰り言が記念号の刊行の遅滞の言い訳になってはならない。この記念号は、3年前の2008年には刊行されているべきものであった。私は、田村先生と、それから論文を寄稿していただいた方々と、衷心からお詫び申し上げる。